平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな：あいちけんりつとよたこうとうがっこう）	愛知県立豊田高等学校

校 長 名：青山　伸一

所 在 地：愛知県豊田市伊保町三本松１番地

電話番号： 0565-45-8622

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	外国語（英語Ⅰ）

≪研究主題≫

言語活動を充実し，英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するための研究

【研究の要点】

Ⅰ　研究指定校の概要

・昭和58年創立，知・徳・体の調和のとれた人間形成が目標

・研究対象科目は主に1年「英語Ⅰ」

（2年「英語Ⅱ」でも同様の取組を展開）

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

〔研究主題設定の理由〕

課題：文法事項の理解や訳読中心の授業

↓　指導体制の確立，授業改善の実施

目標：コミュニケーション能力を育成する機会を保障した授業

※ 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度及びコミュニケーション能力の育成がねらい

〔取組体制〕

・「英語教育研究委員会」を教科会とは別に設置

・研究組織としての英語科会の活用

２　研究内容及び具体的な研究活動

〔研究の重点〕

・英語によるコミュニケーション能力（意思や情報を伝達したり，意見を交わす能力など）を育成するための授業

・生徒の言語活動を中心とした授業への転換

・学校全体の指導体制づくり

〔具体的な取組〕

①　教員の共通理解と研究・研修体制の充実

・「英語教育研究委員会」における研究の推進

・本校英語教育の具体的な目標の設定

・評価研修会の実施　等

②　言語活動及び言語材料の精選と実施の徹底

予習　共通の「予習プリント」による家庭学習

授業　ペア，グループ・ワーク，インタラクション中心

復習　教科書準拠教材による補足の家庭学習

③　授業における具体的な指導手順の確立

※ 共通のハンドアウトによる授業

Pre-reading　オーラル・イントロダクションをインタラクションを通じて行い，本文の概要を把握させる。

While-reading　Q-Aや教師のパラフレーズ等により，本文の内容理解を深める。文法事項や重要表現はペア・ワークやスキットを通じて定着を図る。

Post-reading　ジャーナル・ライティングやスピーチなどで，自己表現をさせる。

④　指導と評価の一体化

・パフォーマンス・テストの実施

・評価研修会において評価規準や定期考査の改善を協議

３　研究の成果と課題

〔成果〕

（上記①について）

研究対象学年とそれ以外の教員間の意識の差が縮小し，全校的指導体制が確立しつつある。

（上記②及び③について）

生徒の中に，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が芽生えてきた。同時に，英語での授業を約7割の生徒が肯定的にとらえている。

（上記④について）

特に「書くこと」において生徒の意識が向上するなど，顕著な成果が表れた。

〔課題〕

・口頭でのコミュニケーションにはまだ積極的でない生徒が見受けられる。心理的負担を徐々に取り除けるようなペア・ワークやワークシートの工夫が必要である。

・訳読の習慣から抜け切れていない生徒への対応として，英文内容を理解させるための言語活動の工夫が必要である。

Ⅰ　研究指定校の概要

1　学校・地域の特色及び実態

本校は昭和58年に開校し，以来「特色ある普通科進学校」を目指し，知・徳・体の調和のとれた人間形成を目標に掲げている。

自動車産業の中核である愛知県豊田市に位置し，市内から約85％の生徒が通学する，地域に根ざした学校である。生徒は部活動への参加率が90％を超え，ボランティア活動にも熱心に取り組んでいる。各教科の学習においては，積極的な姿勢や自信を持てない生徒もいるが，学ぼうとする意欲は比較的高い。

2　学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
全日制	普通科	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
計		9	354	8	318	8	314	25	986

教員数　６０名（１３名）

※研究対象の教科に関する科目の開設状況

１年：「英語Ⅰ」（３単位）及び「英語Ⅱ」（１単位）

２年：「英語Ⅱ」（４単位）

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

言語活動を充実し，英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するための研究

(2) 研究主題設定の理由

「授業を実際のコミュニケーションの場面」とし，英語を使用させる中で，自己表現の苦手な本校生徒に積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度及びコミュニケーション能力を身に付けさせる必要がある。そのためには，教師による一方的な文法事項の説明や訳読を中心とした授業から，コミュニケーション能力を育成する機会を保障し，生徒が積極的に言語活動を行う授業へと転換しなければならない。そのような授業を実現するために，指導法及び評価方法を抜本的に改善するとともに，一部の教員だけではなく英語科全体としての指導体制の構築を目指し，本研究主題を設定した。

(3) 取組体制

通常の英語科会とは別に，当該科目担当者全員による「英語教育研究委員会」を設置し，研究に関するあらゆる事項を協議・検討した。学年単位のものも含め，定例会と臨時開催を合わせ，年間で延べ70回程度開催した。

英語科会では，委員会の内容を伝達するだけでなく，パフォーマンス・テストなどの全校的取組を行う場合を中心に連携を図った。校内研修会の開催，校外での研修の報告会などを通じ，教科としての一体感を維持した。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	□ 保護者授業参観（５月） □ 先進実践校の授業視察（５，７，10月） □ 本校独自の指導目標の作成 □ 生徒及び教員対象意識調査アンケート □ 音読テスト（Ⅰ），（Ⅱ） □ スピーチ・テスト □ 授業公開（中学校教員及び高等学校教員対象） □ 地区別英語科教員研修（研究授業及び協議） □ 英語科教員対象全体研修 （講師：北海道旭川北高等学校　松井 徹朗 教諭）
平成22年度	□ 保護者授業参観（５月） □ 先進実践校の授業視察（６月） □ 生徒対象意識調査アンケート（６月，11月） □ 評価研修会（各学期末） □ 音読テスト（Ⅰ），（Ⅱ） □ ライティング・テスト □ スピーチ・テスト □ 地区別英語科教員研修（研究授業及び協議） □ 研究報告会（愛知県下の高校英語科教員対象）

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

本研究の最重要課題は，英語によるコミュニケーション能力を育成するための授業改善である。本校ではこれまで，文法事項の理解や訳読を授業の中心としてきた。しかし，英語を生涯学び続ける生徒を育てるという観点から，このような授業形態から脱却し，言語活動を中心とした授業への転換が必要であると考えた。本研究以前の指導では，教師からの一方的な知識の伝達に偏っており，意思や情報を伝達したり，意見を交わすなどのコミュニケーション能力を育成する機会を保障してこなかった。また，外国語学習においては，ambiguity tolerance，つまり，曖昧な部分を背景知識や想像力で補ったり，時にはその曖昧さを気にし過ぎずにやり過ごすことも必要であり，そのような力も含めた総合的なコミュニケーション能力の育成が重要である。

そこで，多様な言語活動の経験を通して英語運用能力を身に付けさせる指導の工夫と，それを成功に導くために必要な学校としての指導体制づくりを研究の重点とした。

(2) 具体的な取組

① 教員の共通理解と研究・研修体制の充実

本研究に関する英語科教員の共通理解を深め，英語科全体としての研究体制をつくること及び授業と評価に関する研修を充実させることを目指し，以下のことを行った。

ア 「英語教育研究委員会」を設置し，教科会とは別に研究協議を毎週実施。

イ 授業公開を繰り返し行い，指導法の点検や英語科教員同士の情報交換を実施。

ウ 本校英語教育の具体的な目標を設定。（各自の案に基づき，学年・英語科での協議を経て学校としての目標を設定）

エ 音読テスト，スピーチ・テスト及びライティング・テストを英語科教員全員が試験官となり実施。

オ 評価研修会で，音読テスト等の評価規準や定期考査の改善について協議。

カ 先進実践校（北海道旭川北高校）から講師を招き，校内研修会（終日）を実施。

キ 「地区別英語科教員研修」の会場校として研究授業を実施。

② 授業を英語で行うための言語活動及び言語材料の精選と実施の徹底

言語活動を通じて英語を理解し運用できるようにするため，予習・授業・復習という場面ごとに，以下のように展開した。

予習 「予習プリント」で語彙や重要表現の意味確認と例文作成などを行う。また，「予習プリント」に内容上重要な文やその理解の助けとなる例文を載せておき，各自で理解できるよう工夫した。

授業 ペア・ワークやグループ・ワーク，教師と生徒のインタラクションを中心に展開し，生徒には以下の点を目標とさせた。

・英語を聞き（読み），理解して行動に移したり適切に応答したりする。
・英語固有の音声やリズムを，日本人教師やALT，教材から習得する。
・英語を使って自分の考えを他人に伝える（自己表現をする）。

具体的には，概要把握のためのオーラル・イントロダクション，語彙や表現のパラフレーズ，内容理解を促すteacher talk，リスニングや様々なタイプの音読，Q-A，ペア・スキットやジャーナル・ライティングなどを導入した。

復習 教科書準拠の「ワークブック」や「予習・復習ノート」を利用し，家庭学習（週末課題等）を通して授業内容を補足するようにした。

③ 授業における具体的な指導手順の確立

教科書の各課に９～10時間（各パート３時間見当）を配当し，以下の指導手順で授業を行った。

ア　Pre-readingの活動

・教科書の写真や絵，タイトルを利用して，教師が生徒に英語で質問するなどのインタラクションをしながら，本文の内容を推測させる。

イ　While-readingの活動

・本文の概要を聞いた後，内容把握のためのT-F questionsを行う。

・単語リストの中から聞こえた単語に印をつけ，内容を推測させる。

・ペアになって，新出語句の意味確認と発音練習などを行う。

・教師が本文のモデル・リーディングを行った後，コーラス・リーディング，バズ・リーディング，ペア・リーディングなどで音声面の習熟を図る。

・「予習プリント」に示した重要文の構造や意味の確認を行う。

・Q-Aによって本文の内容をできる限り詳細まで理解できるように，質問の内容や方法を工夫する。

ウ　Post-readingの活動

・overlappingやread and look upなどによって音読練習を行う。

・ペア・ワークやジャーナル・ライティングで，文法や構文の習熟を図る。

・ジャーナル・ライティングで感想や意見などをまとめさせる。

④　指導と評価の一体化

定期考査の出題方法や，筆記試験では測定しづらい能力についての評価規準や評価方法を改善することで，生徒が言語活動にいっそう積極的になることを目指した。

ア　記憶力だけに頼らない音読テスト，スピーチ・テスト，ライティング・テスト等のパフォーマンス・テストの実施。

イ　評価研修会を実施し，パフォーマンス・テストにおける評価規準の確認や，定期考査出題方法の検討。

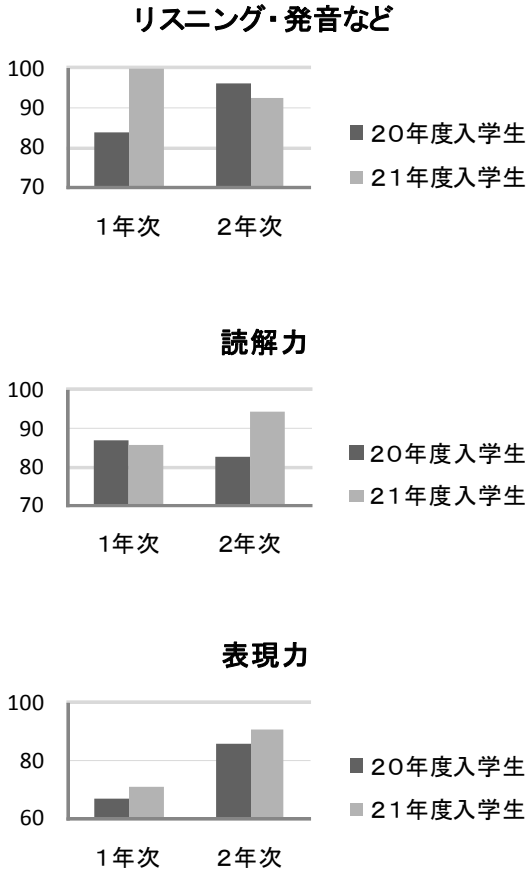
(3) 考察及び成果と課題

①　外部試験の結果から

外部試験の結果を検証したところ，「授業は英語で行うことを基本とする」ことに関して，当初最も懸念された読解力の低下は見られず，むしろ向上していることがわかった。(下記データ参照)

授業の中で教師が話している英語を理解しようとすることや，生徒が互いに意見や情報を英語で伝える活動が，初見の英文の内容を理解する力につながったものと推察される。訳読によらずに英語を通して内容を理解することが，読解力の育成にも有効であることがわかった。

全国の平均点とそれに対する本校の得点率の比較（全国平均を「100」に設定）



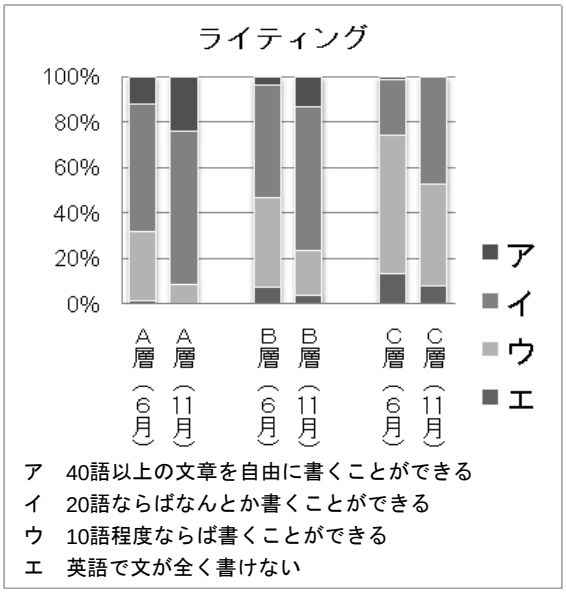
今後は，より難易度の高い話題や内容に対応できるよう，英語による言語活動の質と量を工夫していくことが求められる。

② 生徒意識調査の結果から

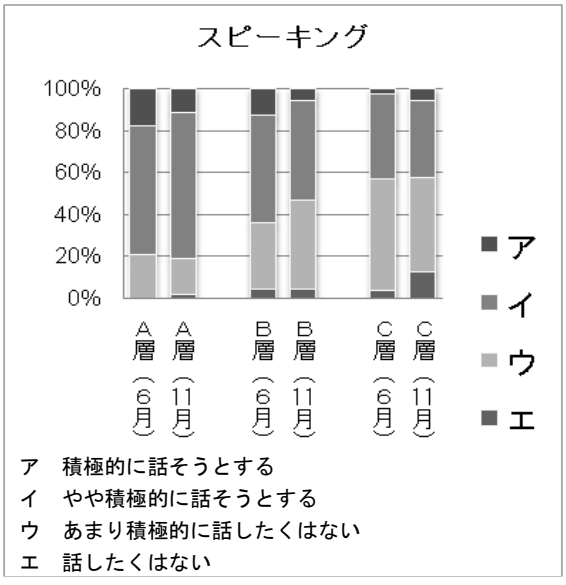
成績層別に，スピーキングとライティングに関する意識の変化を調査した。

意識の向上が顕著に表れたのは，ライティングに関する項目であった。成績層に関係なく，「英語が書けるようになった」と感じる生徒が増加したことは，表現活動を取り入れた授業改善の成果と考えられる。

成績層：Ａ層（上位20%）／ Ｂ層（中位60%）
Ｃ層（下位20%）



一方，スピーキングでは，成績中・下位層で意識の後退が見られた。教科書の内容が難しくなるにつれて，難度の高い質問や活動が増加したためだと思われる。



以上のように，生徒の意識はライティングでは大きく改善したものの，スピーキングでは顕著な変化が見られなかった。英文レベルが上がっても，スピーキングによって積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が維持できるように，教科書の教材化やそれに伴う言語活動の設定方法が今後の大きな課題である。

３ 研究の成果と課題

本研究を通じて，コミュニケーション能力を育成する機会を保障し，生徒が積極的に言語活動を行う授業への転換を図ってきた。現在では共通の指導手順及び共通のハンドアウトの使用により，特に英文の内容を理解させる活動については，どの担当者も一定水準の授業を行うことができるようになってきた。生徒も英語による授業に慣れ，打ち解けた雰囲気の中で授業が進行している。また，授業改善の取組を行う中で，英語科全体としての指導体制も確立することができた。

しかし，口頭でのコミュニケーションにはまだ積極的でない生徒も多いため，心理的負担を徐々に取り除けるようなペア・ワークやグループ・ワーク，それらの活動に使用するワークシート等を工夫し，口頭によるコミュニケーション活動を行う機会を充実させる必要がある。また，教科書の英文を訳読することから依然抜け切れていない生徒への対応として，教科書の英文を理解させるための言語活動のさらなる充実も求められる。

授業が英語によるコミュニケーションの場として機能すると，生徒全員が顔を上げて教師やクラスメートの話を理解しようと努め，メモをとったり，質問をするなど，能動的に取り組む姿勢が見られるようになる。このような授業を可能にする雰囲気づくりができているか，あるいは教師対生徒，生徒対生徒の親和関係を築けているかどうかを常に確認しながら，今後も授業改善を続けていきたい。